

〔研究発表要旨〕

【共同発表】 地域の英語教育の課題と現状調査

——オールイングリッシュの授業・ICT 機器の発達——

佐々木 昌太郎（北海道教育大学函館校）

佐藤 咲里（北海道教育大学函館校 2 年）

高橋 唯人（北海道教育大学函館校 2 年）

佐藤 蒼太（北海道教育大学函館校 2 年）

塚原 来未（北海道教育大学函館校 2 年）

英語能力の向上に力を入れているにもかかわらず、未だに国の定めた「第三期教育振興基本計画」の目標を達成できていないという状況がある。このような現状から、地域の英語教育にどのような課題があるかを把握したいと考えた。したがって、私たちは、「地域の英語教育の現状と課題」を調査するという活動を始めた。

主な活動内容として、市内 3 つの中学校、高等学校の先生方にインタビューを実施した。以下の質問等から、英語教育の現状を調査した。

- ・学習指導要領の改訂に伴うオールイングリッシュ授業のメリット・デメリット
- ・ICT 機器の発達がもたらすメリット・デメリット

学習指導要領の改訂により、高等学校のみならず、中学校でも原則英語で授業を行うこととなった。インタビューから、「英語を話そうとする姿勢がより見受けられる」「生徒が英語に触れる機会が増える」といったメリットがあることが分かった。その反面、「文法の説明は英語では厳しい」「英語での指示が的確に伝わらないことがある」「生徒の英語レベルと合っていない」などのデメリットも挙げられた。また、ICT の発達により、「授業の幅が広がった」「すぐに検索ができる」というメリットがあったが、「調べれば完結してしまう」「情報が多すぎる」などのデメリットも見つかった。

私たちは、この活動を通して、今後英語教員になった際に生かせる点を見つけたいと考えている。

ポストコロナ時代において協同学習が中学校英語学習者に与える影響

——動機づけの視点から——

外崎 美保（函館市立五稜郭中学校）

コロナ禍が学校教育の現場に与えた影響は大きく、その結果、児童生徒に学力や非認知能力の低下が見られ、いじめや暴力などの問題行動や不登校生徒の増加が顕著になっている。発表者の学校現場では、学習環境の問題からか生徒の英語学習に対する動機づ

けが低下していることが調査から明らかになった。本研究では、ポストコロナの中学校現場において、少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法（江利川、2012）とされる「協同学習」を授業に取入れ、問題改善の一助となり得るか動機づけの視点から調査を行った。一つの単元で協同学習を行った後、学習者の動機づけを高める要素とされる「有能性」と「関係性」の欲求が満たされたかどうかを質問紙で調査した。その結果、達成感を感じた（有能性）、グループ内で色々質問したり教え合ったりすることができた（関係性）という回答がともに8割近くあった。発表では、協同学習の実践と現時点での調査結果と分析を報告し考察を述べる。

現実性概念からの受動態の知覚動詞文分析

石川 博基（秋田市立御所野学院高等学校）

受動態の知覚動詞文（以下、「受動態の知覚文」とする）は「一般的事柄」や「証拠性」、「事実や結論」を伝えたとされる。またその知覚には「偶然性」や文主語にとっての「影響性」があるとの報告もされている。本稿は該当の文が持つこれらの意味について認知文法の枠組みから考える。特に Langacker の‘*reality conception*’という知見を基に石川(2023)で論じた、人の知覚行為も何かを支配しようとする生物本能の1つとみなす見方を採る。See, Watch, Look to/at, Observe の受動態の知覚文を現実性概念の観点から観察したところ、そこに現れる To は、知覚経験が生じる現実・局所的・客観世界と、予測や想像、総括等がなされる非現実・全体的・主観世界とを媒介する経路を示すことが分かった。加えて該当の文における知覚の「偶然性」や文主語への「影響性」は、To の経路を辿る発話者の to 不定詞プロセスへの認識的遠さに動機付けられることが確認された。知覚を人間の支配本能と捉える本稿は、該当の文が示す意味や発話者の心的態度に対し一貫した説明を与え、関連する言語現象について人の認識に沿ったより自然な理解を可能にすることを主張する。

英語教師向け「相談型」ICT 活用講座 実践報告

三浦 隆行（東北大学）

2023 年 2 月と 3 月に Zoom で開催した ICT 活用講座（三浦, 2023）に引き続き、8 月 14 日（N=4）と 16 日（N=11）の 2 日間に渡り、「相談型」の英語教師向け ICT 活用講座を対面で行った。会場は東北大学の講義室をお借りし、特に制限のない、高速インターネットを体験していただくため、参加された先生方に、eduroam のゲストアカウ

ントを用意した。私の ICT を活用した英語教育歴、ICT ツールを授業で使う意義などの紹介の後、参加された小中高大学の先生から、「～の単元で活用できる、～の技能を伸ばすツールはないか?」、などの 22 の質問を受け、活用できるツール、活用例、学生の感想などをその場で共有した。参加された先生方に、紹介させていただいたツールを実際に新学期（2 学期、後期）の授業で使用していただいて、講座のお役立ち度、各ツールのお役立ち度、児童、生徒、学生さんの英語学習への効果、授業の進め方への効果、先生方のツールの活用能力の変化の有無を尋ねるアンケート調査を 10 月に実施した。今発表では、「相談型」の英語教師向け ICT 活用講座の詳細と、アンケート結果、そして、今後の展望をお聞きいただく。

英文法指導における動名詞と現在分詞の二分法の妥当性について

佐々木昌太郎（北海道教育大学函館校）

英語の-ing 形は「動名詞 (gerund)」と「現在分詞 (present participle)」とに二分する方式が伝統的に採用されてきた。また、現行学習指導要領の文法事項に関する説明では「動名詞」と「現在分詞」という用語が用いられており、このことから学校英語教育においても動名詞と現在分詞を区別して指導するものとされていると考えられる。しかし、言語学の分野では両者の区別に否定的な立場を主張するものが少なからず存在する。また、学校現場からも現在は両文法事項を明確に区別することは無くなってきているという声が聞かれることがある。本発表においては、学校英語教育においては動名詞と現在分詞は区別されるべきであると主張する。発表では、「動名詞の名詞性の高さ」、「用語に伴う問題」、「動名詞と現在分詞の違いがもたらす意味の違い」の 3 つの観点から英文法指導における動名詞と現在分詞の二分法の妥当性について議論する。

間違い探しタスクのパフォーマンス・データから見えてくる言語的特徴

——ネイティブスピーカーの発話から——

臼田 悦之（函館工業高等専門学校）

ネイティブスピーカーによる間違い探しタスク遂行のパフォーマンス・データを言語的に分析すると、使われている言語形式や特徴的な言い回しなど様々なことが見えてくる。中学校学習指導要領の言語材料に着目した場合、**there** 構文、現在進行形、関係代名詞、分詞の形容詞用法(後置修飾)などが使われており、教科書の新出文法として扱われる項目であることが分かった。また、高等学校の教科書で扱われる文構造や文法事項に注目すると、主語＋動詞＋目的語＋分詞、**there be**＋名詞＋分詞、関係代名詞の非制限用

法、付帯状況を表す **with**、そして分詞構文まで使われていた。更には、濱田（2021）によると、英語のネイティブスピーカーのメタ認知を使った典型的表現例、“**I see**+名詞”なども随所に使われており、ネイティブ感覚を持ちえない日本人英語学習者にとって簡単だが使えない表現が使われていることが分かった。発表では、以上のことを踏まえ間違い探しタスクの授業での効果的扱い方の考察を実践報告と共に述べる。

英語二重課題取組時の視線追跡から導く自律学習支援——パイロット研究（2）

奥崎 真理子（函館工業高等専門学校）

この研究の最終目的は、TOEIC®テストのリスニング問題に苦しむも、「何に困っているか言葉で伝えられない」と悩む函館高専の学生を対象に、リスニング問題解答中の視線解析データから学習方策の自律的改善を導く学習支援方法を確立し、その有用性を検証することである。

パイロット研究では、実験協力を申し出た学生を被験者とし、学生がリスニング問題に取り組む際の視線を記録し、視線の動向を可視化した上で、学生が自身の目線と他者の目線とを比較しながら、自らの認知プロセスを客観的に自己分析するメタ認知的活動を育む試みを行っている。

本研究では、パイロット研究（1）を踏まえ、読字障害を有する学生1名の協力を得て被験者とし、被験者が英語二重課題に取り組む際の視線の動向を可視化した。この被験者に対し、パイロット研究（1）で行った実験に加えて、被験者にCD音声で英語を聴きながら文字を追う「聞き読み」（門田・野呂、2010）を行い、英語二重課題取組時の視線を可視化する実験を行った。その実験結果を被験者に示し、自身の目線の動きを振り返らせた上で、英語を聞きながら読む際の目線の動かし方の改善策を考えさせたところ、英語二重課題取組時中に気を付けたい項目が3点挙げられた。また、その後に実施されたTOEIC®テスト模擬試験で、リスニングスコアが向上した。